海國兵談序（現代語訳）

昨今では「兵」というのは、兵を用いるための道理のことである。そして、「武備（軍備）」というのは、戦いに備えることである。「兵」は理論に属するものであり、「備（そなえ）」は事業に属するものである。これらを時と勢いとに応じてうまく使うだけである。いわゆる「武備」というものは、将来の攻勢作戦や守勢作戦、あるいは戦場での攻撃や防御をうまく行えるよう、前もって準備しておくことであり、そのために考慮すべきことは多方面にわたっている。作戦区域や戦場が広いか狭いか、地形が険しいか緩やかか、昔と今で異なるか同じか、人馬や武器が強いか弱いか、気候が寒いか暑いか、敵国が大きいか小さいか、遠いか近いか、時間的にゆっくりできるか急がねばならないか、有利か不利か、衰えているか旺盛であるか、つまるところこれらすべてを測り知ることである。我と敵がお互いに戦況の推移に従いながら、戦機（戦場で訪れるチャンス）を先につかんだほうが相手より優勢な立場に立つ。隠密に謀議し、事前に熟慮していれば、絶対に手抜かりはない。このようにしてもなお、兵を用い、武を備えることのあるべき姿としては、十分とは言えないのである。事前に熟慮するとは、怠ることではない。長い年月をかけて兵学の習得に務めることでますます詳（くわ）しくなり、研究してあらゆることを自分のものにすれば、至らないことはなくなる。雄武俠烈（ゆうぶきょうれつ）の風※1が緩むこともないので、謀反を心に抱く者は一人もおらず、周辺諸国は恐れてひれ伏すことになるので、敢えて領土を侵犯

することもない。このような状態を幾世代にもわたって維持し続けてこそ、人民は永遠に兵革乱離(へいかくらんり)※2の苦しみを受けなくてすむのである。これぞ理想とすべき、あるべき姿ではないか。その業績のなんと偉大なことよ。およそ兵とは時に臨んで威力を発揮し、備(そなえ)とは平和な世をもたらす働きをする。平和が長く続いた時には、武備は拡張せず、それゆえ兵を実動させるようなことも無い。用兵の理論も不明であり、それゆえに武備を拡張するようなことも無い。事業と理論のどちらもが互いに停滞したままである。我が神祖開業※3以来、平和な時代が続いてすでに久しい。国内外ともに戦(いくさ)がない。世の兵というものは単なる理論上の研究に過ぎず、兵卒を実際に指揮する機会は無い。実を言えば今こそ、国家として武を備えなければならない時である。しかしながら、今これを備える立場にある者は、徒(いたずら)にその理論を談じるだけで、その方策をあれこれと考察していない。旧来のやり方に従い、新しいことの習得を疎(おろそ)かにしている。新たな兵学・兵術へと流れがだんだん移りつつあるにもかかわらず、古いやり方からあらためず、かりそめの形で間にあわせてきたので、終(つい)には廃(すた)れ弛(ゆる)んで使い物にならなくなった。もはや兵も武備も同じく空理空論に過ぎない。嘆かずにいられようか。これはあたかも、兵革乱離の中にある人の心が学問を怠るようなものである。ただ時の過ぎ行くままに従うのみである。兵は時に臨んで威力を発揮し、備(そなえ)は平和な世をもたらす働きをする。平和な世が続けば、備(そなえ)は廃止され、あるいは（本来の趣旨を見失った）事業に過ぎなくなる。今は事業をどうするかよりも、兵の理念を打ち立てるべきであるが、

これまで優れた兵理を見たことがない。そうは言っても、時勢はそれを許さないところまで来ている。大いに勉強する人でなければ、断じてこれに及ぶことができない。私の友人に林子平という者がいる。慷慨（こうがい）※4の士である。あっさりして物事に執着しない性格で、欲は少ない。心に大義がある。その親族には官位が高い人が多いので、「家のためにならない」と子平を蔑（さげす）んで見ている。（子平は）方々を歩きめぐることが大好きで、仙台藩の全域をほとんど廻り歩いた。その間の生活ぶりは、常に戦場にいるようで、藍染めのボロ布をまとい、粗末な食事をとり、草地を行き、露天に宿した。これらを楽しみながら、何ものにも拘束されず、心のおもむくままに伸び伸びとしていたという。かつて憤然として志を立て、それにより数十年間学び続けてきた。子平の著書が本棚に満ちているが、そのすべてが当世に採るべき策を論じている。この全編の名を『海國兵談』という。その意味は読んで字のごとくである。我国は海国である。海からの侵攻に備えておく必要がある。それ故、どうしてこの書を読まずにおられようか。その論説は確実であるが激しく厳しい口調でもある。子平の人となりを目で観るようだ。一方で海外の奇策で、昔から今までに見たことも聞いたこともないようなものを選んで、これを紹介している。このように我国の防衛については、この書を読めばほとんど理解できる。林子平の志していることは、並外れて優れていると言わざるを得ない。今の世に当たり、事前に熟慮するとは、怠ることではない。長い年月をかけて兵学の習得に務めることでますます詳（くわ）しくなり、研究してあらゆることを自分のものにすれば、至ら

ないことはなくなる。そうして導き出された教えを幾世代にも伝えてゆくことで、人民は永遠に兵革乱離（へいかくらんり）の苦しみを受けなくてすむのである。それが今まさに、ここにある。それがここにあるではないか。

天明六年夏五月二十六日　仙臺　工藤球卿（くどうきゅうけい）※5撰

※1　雄武俠烈（ゆうぶきょうれつ）の風＝雄々しく武を尊び、男らしく激烈に戦おうとする風潮

※2　兵革乱離（へいかくらんり）＝戦争によって世が乱れ、人々が離散してしまうこと

※3　我が神祖開業＝不明、徳川家康による江戸幕府開業のことか？

※4　慷慨（こうがい）＝世の中の不正を憤り、嘆くこと

※5　工藤球卿（くどうきゅうけい）（享保十九年～寛政十二年）

江戸時代中期の仙台藩江戸詰の藩医であるとともに、経世論家。医師としては工藤周庵（くどうしゅうあん）、環俗後は平助と名乗った。

日本で最初のロシア研究書である『赤蝦夷風説考』の筆者で、和・漢・蘭三学に通じ、長崎で唐人やオランダ人と交際して海外事情の吸収につとめた。